

I Samuel 2:30-35, 3:1-21, 4:1-13

(Iサムエル記2:30)『それゆえ、——イスラエルの神、【主】の御告げだ——あなたの家と、あなたの父の家とは、永遠にわたしの前を歩む、と確かに言ったが、今や、——【主】の御告げだ——絶対にそんなことはない。わたしは、わたしを尊ぶ者を尊ぶ。わたしをさげすむ者は軽んじられる。』

私たちの人生において、私たちは神さまを敬うように注意深く歩もうではありませんか。詩篇107:1-2には、こう書かれています。

(詩篇107:1-2)『主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。』【主】に贖われた者はこのように言え。主は彼らを敵の手から贖い、

主に贖われた者は、今日も同じように言う必要があります。

(Iサムエル記2:31-34)『見よ。わたしがあなたの腕と、あなたの父の家の腕とを切り落とし、あなたの家には年寄りがいなくなる日が近づいている。イスラエルはしあわせにされるのに、あなたはわたしの住む所で敵を見るようになる。あなたの家には、いつまでも、年寄りがいなくなる。わたしは、ひとりの人をあなたのために、わたしの祭壇から断ち切らない。その人はあなたの目を衰えさせ、あなたの心をやつれさせよう。あなたの家の多くの者はみな、壮年のうちに死ななければならない。あなたのふたりの息子、ホフニとピネハスの身にふりかかることが、あなたへのしるしである。ふたりとも一日のうちに死ぬ。』

この箇所書かれている預言は、全部その通りになりました。神さまのみことばを読み進んでいくと、これらのことが実現するのが分かります。

(Iサムエル記2:35)『わたしは、わたしの心と意思の中で事を行う忠実な祭司を、わたしのために起こそう。わたしは彼のために長く続く家を建てよう。彼は、いつまでもわたしに油そそがれた者の前を歩むであろう。』

この節は“誰”のことを話しているのでしょうか？主イエス・キリストのことです。覚えていらっしゃるでしょうが、ハンナの祈りの中では、主は来るべき王、メシヤとして言及されていました。主はモーセによって、預言者と言われており、今、Iサムエル記のこの箇所では、主は祭司と言われています。主イエス・キリストは預言者であり、祭司であり、王です。主は、これらすべての役職を成就される、唯一のお方です。

3章

テーマ: サムエルの召し。

神さまからのサムエルの召しは、通常子どもたちのための物語のように扱われます。この物語をナーサリーから出して、大人のクラスに持って来ましょう。この話は、単に美しい物語であるだけではなく、聖書の中の大きな移行期のうちのひとつを記録しています。神権政治から君主政治へ、祭司から王への移行です。

サムエルへの召しは全部で4回あります。最初と二番目の召しは、救いへの召しです。(7節)あとの二つは、奉仕への召しです。表向きは、キャロルによって彼の友人の子どもでもあるアリス・リデルのために書かれた“不思議の国のアリス”が、彼の時代の社会秩序に対する哲学的な告発であったように、サムエルの召しの物語は、子どもたちのための楽しい物語であるという以上のものです。この物語は、政府の形態の非常に大きな変化を開始するものなのです。士師の時代は終わり、神さまはもう祭司たちの中で働かれることはありません。神さまは今、祭司としての預言者を起こされようとしています。サムエルは主のためにミニストリーをしますが、彼の役職は預言者となります。サウルとダビデの両方の王に油を注ぐのは彼です。神さまは一度も、直接王には語られることはなく、預言者を通してだけ語られます。

(Iサムエル記3:1)「少年サムエルはエリの前で【主】に仕えていた。そのころ、【主】のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった。」

この“少年”ということばに注目したいのです。サムエルは小さな子どもだったわけではありませんでした。歴史家のヨセフスは、彼が12歳だったと言っています。おそらくティーンエイジャーだったことでしょう。サムエ

ルは若者で、エリの前で主に仕えていました。4歳の子どもが会見の天幕で主に仕えることはありません。(訳注:子どもの絵本などでよく、サムエルが4-5歳の子どもの姿で描かれていることに対してこう言っているものと思われます。)

この節には、「【主】のことばはまれにしかなく」と書かれています。神さまはこの特定の時期に、ご自身を啓示されてはおりませんでした。サムエルを預言者として召されるときに、神さまは動き始められました。神さまは、士師と祭司を用いられることから、預言者を用いられることに移行しておられます。預言者が、王に対する、そして王のためのスポークスマンになるのです。

(Iサムエル記3:2-3)「その日、エリは自分の所で寝ていた。―彼の目はかすんできて、見えなくなっていた―神のともしびは、まだ消えていず、サムエルは、神の箱の安置されている【主】の宮で寝ていた。」
会見の天幕のともしびの世話をするのは祭司たちの役目でした。彼らが油をさして、ともしびが燃え続けるようにしなければなりません。エリは年をとって、目がかすんでいて、ともしびはもう見えなくなっていました。

(Iサムエル記3:4-5)「そのとき、【主】はサムエルを呼ばれた。彼は、『はい。ここにおります』と言って、エリのところに走って行き、『はい。ここにおります。私をお呼びになったので』と言った。エリは、『私は呼ばない。帰って、おやすみ』と言った。それでサムエルは戻って、寝た。」
エリはサムエルが夢を見ていたのだと思い、ベッドに戻るようには言いませんでした。

(Iサムエル記3:6)「【主】はもう一度、サムエルを呼ばれた。サムエルは起きて、エリのところに行き、『はい。ここにおります。私をお呼びになったので』と言った。エリは、『私は呼ばない。わが子よ。帰って、おやすみ』と言った。」
ここで、神さまのサムエルへの最初の二回の召しは、救いへの召しであったことを心に留める必要があります。

(Iサムエル3:7)「サムエルはまだ、【主】を知らず、【主】のことばもまだ、彼に示されていなかった。」
サムエルは主を知りませんでした。神さまは彼を救いへと召しておられました。責任のある年齢とはいくつでしょう？それがいくつであったとしても、サムエルがその年齢に達したので、神さまはいま、彼の責任を問われるのです。民数記では、男性は20歳にならなければ戦争に出ることはできませんでした。レビ人たちは25歳になるまで奉仕を始めませんでしたし、祭司たちは30歳で奉仕を始めました。イスラエル人たちが不信仰のゆえに荒野をさまようためにくびすを返したとき、20歳未満の者たちだけが生き延びて約束の地に入ることを許されました。私には、サムエルがはっきりいくつだったのかは分かりませんが、幼児ではなかったことは確かです。20歳が責任の年齢なのでしょうか？私には分かりません。私はただ、多くの人たちが考えているよりも、責任の年齢はうんと高いということだけを提案しているのです。

質問はいつでも、「神さまはサムエルを5回、6回、7回または50回も呼ぶことをされたでしょうか？」ということです。救われるには“とき”があると、私は心から信じています。次のように表現されています。

天国へ行くか、絶望か、
人の運命を明示する、
ときがある。私はいつだか知らない。
場所がある。私はどこだか知らない。

人はどれほど罪を犯し続けていられるだろうか。
神さまはどれほど忍耐してくださるだろうか？
どこで希望が終わり、
どこから絶望の境界線が始まるのだろうか？

ひとつの答えが天から送られてきた。

「神から離れている者よ。
きょう、と言われている間に悔い改めよ。
あなたの心をかたくなにしてはならない。」
—作者不詳

明らかに、人が神さまに立ち返ることのできない日がやって来るのです。

ヘルマン・ギョリンク(Hermann Wilhelm Göring (or Goering): 1893年1月12日—1946年10月15日。ドイツの政治家で郡のリーダー。そしてナチスの主要メンバー。ウィキペディアより)が裁判でのちに処刑されるために刑務所に入れられたとき、刑務所の教誨師(チャプレン)が彼と長い話をしました。教誨師は、神さまに会う備えの必要性を強調しました。会話をしていると、ギョリンクは一定の聖書の真理をあざ笑ひ、キリストが罪人のために死なれたという事実を受け入れることを拒否しました。彼は意図的に血の力を否定したのです。「死は死じゃないか」というのが彼の最後のことばの要旨でした。

教誨師が彼の小さな娘が天国で彼に会う望みについて話すと、彼は答えました。

「彼女は彼女のやり方で信じるさ。私は私のやり方でね。」

立ち去るときに、教誨師はとてもがっかりしていました。それから1時間もたたないうちに、彼はヘルマン・ギョリンクが自殺したと聞きました。神さまはこの男を呼ばれたのに、彼がそれを拒否したのです。

神さまは何度も呼ばれるかもしれませんが、明らかに、人の心がかたくなになる日が来ます。箴言29:1にはこう書かれています。

(箴言29:1)「責められても、なお、うなじのこわい者は、たちまち滅ぼされて、いやされることはない。」

さて、私は、あなたが赦されることのない罪を犯すことはできないと信じます。それは、あなたが今日中に、明日までに赦されることのできない罪を犯すようなことはできないという意味です。でも、神さまが恵みを引っ込めてしまわれるようなことがあるでしょうか？いいえ、神さまは絶対にそんなことはなさいません。でも、人間は自分の良心が熱い鉄で焼印を押されたようになるまで、抵抗し、反抗し、拒否することがあります。カインや、バラムや、サムソンや、コラやアハブはすべて、彼らの背を神さまにむけるところまで行ってしまいました。使徒の働き24:25には、ローマの総督ペリクスがどうなったかが書かれています。パウロが彼の前で告発されたのです。

(使徒24:25)「しかし、パウロが正義と節制とやがて来る審判とを論じたので、ペリクスは恐れを感じ、『今は帰ってよい。おりを見て、また呼び出そう』と言った。」

アグリッパ王はパウロに言いました。

(使徒26:28)「・・・『あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている』・・・」

キリストは、人が絶望してしまわないように、ひとりの強盗を救われました。でも、人間が付け上がるのがないように、ひとりだけしかお救いになりませんでした。(ルカ23:39—43参照)

(ルカ23:39—43)「十字架にかけられていた犯罪人のひとりはいエスに悪口を言い、『あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え』と言った。ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。『おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。』そして言った。『イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。』イエスは、彼に言われた。『まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。』」

(Iサムエル3:8—10)「【主】が三度目にサムエルを呼ばれたとき、サムエルは起きて、エリのところに行き、『はい。ここにおります。私をお呼びになったので』と言った。そこでエリは、【主】がこの少年を呼んでおられ

るということを悟った。それで、エリはサムエルに言った。『行って、おやすみ。今度呼ばれたら、「【主】よ。お話してください。しもべは聞いております」と申し上げなさい。』サムエルは行って、自分の所で寝た。そのうちに【主】が来られ、そばに立って、これまでと同じように、『サムエル。サムエル』と呼ばれた。サムエルは、『お話してください。しもべは聞いております』と申し上げた。」

この箇所はサムエルへの第三、第四の召し、奉仕への召しを含んでいます。

(Iサムエル3:11-12)「【主】はサムエルに仰せられた。『見よ。わたしは、イスラエルに一つの事をしようとしている。それを聞く者はみな、二つの耳が鳴るであろう。その日には、エリの家についてわたしが語ったことをすべて、初めから終わりまでエリに果たそう。』」

神さまが何かを言われたとき、それはすでに成し遂げられたのと同じです。旧約聖書には、「預言的時制」と呼ばれてきたものがあります。過去形で語られていますが、未来のことについて語っています。神さまは、まだ起こってはいないことを、もうすでに起こったことのように語られます。神さまが、何かが起こると言われたなら、“確かに”そのことは起こるのです。神さまはこの箇所、いよいよエリの家に反対して動こうとしておられることをサムエルに語られます。

さてこの少年サムエルは、最後までエリに忠実です。彼はエリをひそかに傷つけようなどとはしようとしませんでした。彼はエリのところに行き、神さまが自分に語られたことを一部始終話しました。もしもあなたが今日、神さまへの奉仕をしていて誰かほかの人のもので仕えているなら、その人に誠実でありなさい、と言いたいのです。自分は神さまに忠実であると言いながら、あなたの上に立てられている人に不忠実であることができるなどとは言わないでください。ああ、今日どれほど忠実さが必要であることでしょう！

(Iサムエル記3:21)「【主】は再びシロで現れた。【主】のこばによって、【主】がご自身をシロでサムエルに現されたからである。」

神さまはどのようにしてご自身を現されたのでしょうか？みこばによってです。今日もまた、神さまはご自分のみこばを通してご自分を示しておられます。神さまは、ご自分の御霊によって、聖書のページを照らしておられます。あなたも私も、そのようにして神さまを知るようになったのです。そして神さまを知ることは、永遠のいのちです。

4章

テーマ: エリと息子たちへの神さまの裁きの成就。

サムエルに相談しないでペリシテ人との戦いに出て行ったイスラエルは、大敗します。そのあと彼らは、これがあれば勝てるのではないかと考えて、契約の箱を戦いに持ち出します。このことは何か、ものに力があると考え、人々の迷信的な異教的影響を明らかにします。契約の箱は奪われ、エリのふたりの息子たちは殺され、エリはそのニュースを聞いて死んでしまいました。

契約の箱がペリシテ人に奪われる。

この章は、確かに暗い場面です。このときのイスラエルの霊的な状態が分かります。神さまは、ご自分がエリの家に対してすると言われたことに、決着をつけられます。

(Iサムエル4:1-3)「サムエルのこばが全イスラエルに行き渡ったころ、イスラエルはペリシテ人を迎え撃つために戦いに出て、エベン・エゼルのあたりに陣を敷いた。ペリシテ人はアフェクに陣を敷いた。ペリシテ人はイスラエルを迎え撃つ陣ぞなえをした。戦いが始まると、イスラエルはペリシテ人に打ち負かされ、約四千人が野の陣地で打たれた。民が陣営に戻って来たとき、イスラエルの長老たちは言った。『なぜ【主】は、きょう、ペリシテ人の前でわれわれを打ったのだらう。シロから【主】の契約の箱をわれわれのところに持って来よう。そうすれば、それがわれわれの真ん中に来て、われわれを敵の手から救おう。』」

聖書のこの箇所は、イスラエルが迷信的であることと、彼らがどれほど神さまから離れてしまっているかを私たちに示しています。彼らの自己過信と身勝手さがどれほど強いかを教えてください。

神さまの指示を仰ぐことを考えもせずに、彼らはペリシテ人に対抗して出て行きます。何が起こったでしょう？彼らは負けてしまいます。何が欠けているのでしょうか？彼らは、きっと戦いに契約の箱を持って行くべきだったんだ、と考えます。契約の箱がヨルダン川に運んで行かれたとき、水がせき止められてイスラエルは川を渡ることができたという契約の箱の歴史を知っていた彼らは、契約の箱を戦いに持って行きました。契約の箱の存在が、彼らに勝利をもたらすだろう、という考え方です。

ものに力があると考えるのは、この人々の迷信深さと異教の影響を明らかにしています。この箱に力があるわけではありません。なぜなら、神さまがその箱の中におられるのではないからです。神さまを箱に入れることなどできません！力は神さまのご臨在とご人格にあるのです。

今日、教会の働きの中で、多くの人々は同じように迷信的です。彼らはまるで、神さまが箱の中におられるように思っています。彼らは言います。

「この方式を見てごらん。これはなかなか良いひとまとめのセット(package deal)じゃないか。成功の箱詰めのようなものだ。この方式で問題は解決するよ。」

今日、あまりにも多くの人々がそのような方向に動いています。これは、霊的なものではありません。迷信的なのです。力はキリストにあるのです。成功は、私たちがキリストのうちにいるかどうかで決まります。それが大切なのです。

(Iサムエル4:4-5)「そこで民はシロに人を送った。彼らはそこから、ケルビムに座しておられる万軍の【主】の契約の箱をかついで来た。エリのふたりの息子、ホフニとピネハスも、神の契約の箱といっしょにそこに来た。【主】の契約の箱が陣営に着いたとき、全イスラエルは大歓声をあげた。それで地はどよめいた。」イスラエルは戦いに行きます。彼らは契約の箱のために人をシロに送ります。ホフニとピネハスは「金で雇われた説教者(paid preachers)」なので、やれと言われたことは何でもするのです。契約の箱が陣営に持ち込まれたとき、イスラエル人たちは大歓声をあげます。彼らはこれで自分たちが何か霊的になったと思っていますが、これは偶像礼拝以外の何ものでもありません。彼らは神さまではなく、箱を礼拝しているのです。

教会の儀式には十分に気をつけようではありませんか。私たちは教会を礼拝しているのでしょうか？それとも、人を礼拝しているのでしょうか？方式を礼拝していますか？何か、一定の場所を礼拝していますか？それとも私たちは、本当に、生けるまことの神さまを礼拝しているのでしょうか？

(Iサムエル4:6-8)「ペリシテ人は、その歓声を聞いて、『ヘブル人の陣営の、あの大歓声は何だろう』と言った。そして、【主】の箱が陣営に着いたと知ったとき、ペリシテ人は、『神が陣営に来た』と言って、恐れた。そして言った、『ああ、困ったことだ。今まで、こんなことはなかった。ああ、困ったことだ。だれがこの力ある神々の手から、われわれを救い出してくれよう。これらの神々は、荒野で、ありとあらゆる災害をもってエジプトを打った神々だ。』」

ペリシテ人たちは、契約の箱がイスラエルの陣営に着いたと知りました。彼らは「神が陣営に来た」と言って恐れます。彼らにとって、契約の箱は偶像なのです。これは、ペリシテ人たちが迷信的で無知であることを示しています。彼らは神さまの力は聞いていましたが、確かに生けるまことの神さまに関しては全く分かっていません。

エリが死に、神さまのご栄光がイスラエルから離れる

ペリシテ人とイスラエル人が戦って、イスラエルが戦いに負けます。イスラエル人の多くが殺され、神さまの契約の箱は奪われ、そしてエリの息子たち、ホフニとピネハスも殺害されます。

(Iサムエル4:12-13)「その日、ひとりのベニヤミン人が、戦場から走って来て、シロに着いた。その着物は裂け、頭には土をかぶっていた。彼が着いたとき、エリは道のそばに設けた席にすわって、見張っていた。神の箱のことを気づかっていたからである。この男が町に入って敗戦を知らせたので、町中こぞって泣き叫んだ。」

年老いたエリは、すべての欠陥はありましたが、神さまの大祭司であり、神さまのことにに関して、本当に気づかっていました。